高等学校
国語（国語総合　古典）

漢詩の学習（基礎編）

古典の学習の中で、漢文の単元があります。その中で、漢詩の学習を行います。漢詩は古来日本人の思考や思想に影響を与え、日本文化の形成にも関わっています。

そこで、今日は、漢詩を読み味わい、自己との対話に活用するために、漢詩のきまり等について学びましょう。

本編は、漢詩の基礎知識の学習の後に、学習内容の確認ができるようになっています。

また、漢文の訓読に関する学習がまだの人でも、学習できるように構成されています。

では、早速漢詩の世界を覗いてみましょう！

高等学校
国語（国語総合　古典）

漢詩の学習（基礎編）

○漢詩…一般に唐の時代（六一八～九〇七年）の詩（唐詩）をさす。

○唐の四時期と主な詩人

・初唐…王勃（おうぼつ）、楊炯（ようけい）、駱賓王（らくひんのう）など

・盛唐…李白（りはく）、杜甫（とほ）、王維（おうい）、孟浩然（もうこうねん）など

・中唐…白居易（はっきょい＝白楽天（はくらくてん））、韓愈（かんゆ）、柳宗元（りゅうそうげん）など

・晩唐…杜牧（とぼく）、李商隠（りしょういん）など

○唐の各時期の詩

まずは、漢詩の例として四つ紹介します。
それぞれの形式の違いに注目してください。

①初唐

易水送別
駱賓王

此地別燕丹　（書き下し文）
（此の地燕丹に別る）

壮士髪衝冠
（壮士髪冠を衝く）

昔時人已没
（昔時人已に没し）

今日水猶寒
（今日水猶寒し）

【現代語訳】
（君を見送る）この易水の地こそ、かつて刺客の荊軻が燕の太子丹と別れたところだ。そのとき忠臣荊軻の髪はいきどおりのあまり冠をつきあげるばかりであった（あれからもう八、九百年）。その当時の人々は没し去ってしまったが、易水の水は今もなお、昔のままに寒寒と流れているのみである。

○唐の各時期の詩

②盛唐

春望

杜甫

國破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

（書き下し文）

（國破れて山河在り）
（城春にして草木深し）
（時に感じては花にも涙を濺ぎ）
（別れを恨んでは鳥にも心を動かす）
（烽火三月に連なり）
（家書萬金抵る）
（白頭搔けば更に短く）
（渾て簪に勝えざらんと欲す）

【現代語訳】

戦乱によって都長安は破壊されたが、山河は変わらず、町は春を迎え自然に草木が生い茂っている。

時世を思う花鳥の鳴き声を聞き、家族との別れを美しい涙がふれ、

家族からの手紙は三月の長き間掲げられ、

戦いの途絶えが来る便りは万金に値する。

家にかもめが白髪を掻くと毛がどんどん抜け、

金のろっかくを思い掻くと毛がどんどん冠をけっして簪に耐えなくなりそうだ。

止まる音は美しく、草木は依然として変わらず、

てかもしれない。

めまりとれとえ自然は破壊されたが、

るすのはの思いなどっ

かまくるなほ信はしを美て

んすなっどは三て辛し草は

ざ薄くた貴途か心さい木が

しくた頭重絶月がに花が

も なり を にえ も の 痛 美 を 生 と

差 す 搔 思 て 長 む を 見 し

す こ く え 稀 き 。 生 い て

こ と と る に 間 し 。 き 茂 変

と が 毛 。 来 掲 て 鳥 っ わ

が が 便 げ い の て ら

で どん りは られ る 涙 い ず

き どん 万 、 鳴 が る 、

な 。 き ある 。

い ふ

ほ れ

ど

○唐の各時期の詩

③中唐

對月憶元九

白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

（書き下し文）

（銀臺金闕　夕沈沈）
（獨り宿し相思ふて　翰林に在り）
（三五夜中新月の色）
（二千里外故人の心）
（渚宮の東面　煙波冷やかに）
（浴殿の西頭　鐘漏深し）
（猶恐る清光の　同じく見ざるを）
（江陵は卑濕にして　秋陰足る）

【現代語訳】

ここ宮中の御殿も門もひっそりとしていて静かに夜は更けていく。

私は一人、翰林院に宿直して君のことを思っている。今夜は十五夜で、出たばかりの満月は澄みわたっている。

二千里ここは遠く離れた旧友の心が思いやられる。君のいる渚宮の東側は、たちこめた煙波のほとりの冷やかな時を告げる鐘と水時計の音が中の方からかすかに聞こえてくるよ。

君もまた、この月を見て、私と同じように心配なのは、てくれることだけだ。

君深い池の中の江陵は湿気も多くて秋でも曇りがちらしい。

高等学校　国語（国語総合　古典）　漢詩の学習（基礎編）　5

○唐の各時期の詩

④晩唐

秋夕

杜牧

銀燭秋光冷畫屏（銀燭秋光　畫屏冷やかなり）
輕羅小扇撲流螢（輕羅小扇　流螢を撲つ）
天階夜色涼如水（天階の夜色　涼水のごとし）
臥看牽牛織女星（臥して看る　牽牛織女の星）

（書き下し文）

【現代語訳】
白銀色の秋の夜の灯が、彩り豊かな絵屏風に冷たく反射している。
宮女が一人、薄い絹の団扇を小さく打ちながら飛び交う蛍と戯れている。
天上の夜空の様子は、水のように涼しく見える。
あの宮女は寝ながら、牽牛星と織姫星を見つめ続けているなぁ。

○漢詩の形式

唐の時代以降に定まった形式で、絶句と律詩の二種類がある。

①絶句

- 四句（四行）で構成される
  第一句（起句）、第二句（承句）、第三句（転句）、第四句（結句）
- 形式と押韻（脚韻）
  五言絶句＝一句が五文字
  偶数句末で韻を踏む
  七言絶句＝一句が七文字
  第一句末と偶数句末で韻を踏む

②律詩

- 八句（八行）で構成される
- 二句一組を聯と呼ぶ
  第一・二句＝首聯（しゅれん）
  第三・四句＝頷聯（がんれん）
  第五・六句＝頸聯（けいれん）
  第七・八句＝尾聯（びれん）
- 対句をつくる
  頷聯（第三・四句）、頸聯（第五・六句）はそれぞれ対句にする
- 形式と押韻（脚韻）
  五言律詩＝一句が五文字
  偶数句末で韻を踏む
  七言律詩＝一句が七文字
  第一句末と偶数句末で韻を踏む

○五言絶句の実際

・四句（四行）
・一句が五文字
・偶数句末で押韻

静夜思　李白

○七言絶句の実際

・四句（四行）
・一句が七文字
・第一句末と偶数句末で押韻

春夜聞笛　　李白

起句	誰家玉笛暗飛聲
承句	散入春風滿洛城
転句	此夜曲中聞折柳
結句	何人不起故園情

句

言

七言

押韻（脚韻）
セイ
セイ
セイ

○五言律詩の実際

・八句（八行）
・一句が五文字
・頷聯（第三・四句）、頸聯（第五・六句）はそれぞれ対句
・偶数句末で押韻

月夜　杜甫

今夜鄜州月　首聯
閨中只獨看　首聯
遙憐小兒女　頷聯
未解憶長安　頷聯
香霧雲鬟濕　頸聯
清輝玉臂寒　頸聯
何時倚虚幌　尾聯
雙照淚痕乾　尾聯

言
五言

句

対句
対句

押韻（脚韻）
カン
アン
カン
カン

○七言律詩の実際

・八句（八行）
・一句が七文字
・頷聯（第三・四句）、頸聯（第五・六句）はそれぞれ対句
・第一句末と偶数句末で押韻

登高　杜甫

風急天高猿嘯哀
渚清沙白鳥飛廻
無邊落木蕭蕭下
不盡長江滾滾來
萬里悲秋常作客
百年多病獨登臺
艱難苦恨繁霜鬢
潦倒新停濁酒杯

首聯　頷聯　頸聯　尾聯

句　対句　対句

言　五言

押韻（脚韻）
ハ イ
ダ イ
ラ イ
カ イ
ア イ

それでは、最初に紹介した四つの詩について、漢詩の形式、押韻、対句（律詩の場合）を確認してみましょう。

①初唐

易水送別　駱賓王

此地別燕丹
壮士髪衝冠
昔時人已没
今日水猶寒

②盛唐

春望

杜甫

國破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

③中唐

對月憶元九　　白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

④晩唐

秋夕

杜牧

銀燭秋光冷畫屏
輕羅小扇撲流螢
天階夜色涼如水
臥看牽牛織女星

〈確認〉

①初唐

易水送別　駱賓王

此地別燕丹
壯士髪衝冠
昔時人已没
今日水猶寒

※形式……五言絶句（一句五文字×四句）
※押韻……冠・寒（カン・カン）
（この詩では第一句の「丹」も）

②盛唐

春望　杜甫

國破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

※形式……五言律詩（一句五文字×八句）
※押韻……深・心・金・簪（シン・シン・シン・キン・シン）
※対句……第三句と第四句（頷聯）
第五句と第六句（頸聯）

〈確認〉

③中唐

對月憶元九　白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

※形式……七言律詩（一句七文字×八句）
※押韻……沈・林・心・深・陰（チン・リン・シン・キシ・イン）
※対句……第三句と第四句（頷聯）
第五句と第六句（頸聯）

④晩唐

秋夕　杜牧

銀燭秋光冷畫屏
輕羅小扇撲流螢
天階夜色涼如水
臥看牽牛織女星

※形式……七言絶句（一句七文字×四句）
※押韻……屏・螢・星（ヘイ・ケイ・セイ）

高等学校
国語（国語総合　古典）

漢詩の学習（基礎編）

以上で、漢詩のきまり等、基礎知識の学習を終わります。同様のことを、教科書等で漢詩を探して、復習してみてください。

なお、次頁から、漢文の訓読について学習している人向けの、漢詩の書き下し等の学習ができるようになっています。可能な人は、続けてどうぞ。

〈訓読しよう〉

次の漢詩を書き下してみましょう。

① 易水送別　駱賓王

此ノ地別ニル燕丹ニ
壮士髪衝レク冠ヲ
昔時人已ニ没シ
今日水猶ホ寒シ

②春望

杜甫

國破レテ山河在リ
城春ニシテ草木深シ
感ジテハ時ニ花ニモ濺ギレ涙ヲ
恨ンデハ別レヲ鳥ニモ驚カスレ心ヲ
烽火連ナリ三月ニ
家書抵ルニ萬金ニ
白頭掻ケバ更ニ短ク
渾テ欲スレ不ラント勝ヘレ簪ニ

③

對月憶元九

白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

④

秋夕

杜牧

銀燭秋光冷ヤカニ畫ナリ屏ニ
輕羅小扇撲ツニ流螢ヲ
天階ノ夜色涼如シ水ノ
臥シテ看ル牽牛織女ノ星

⑤

静夜思

李白

牀前看月光（ニ ル ヒカリヲ）
疑是地上霜（フラクハ ノ シモカト）
舉頭望山月（レ ゲテ ヅボウヲ ニ ミ ル ヤマノ ツキヲ）
低頭思故郷（レ テ ヅボウヲ ニ フ コキョウヲ）

⑥

春夜聞笛ヲ

李白

誰ガ家ノ玉笛カ暗ニ飛バスレ聲ヲ

散ジテ入リテ春風ニ満ツ洛城ニ

此ノ夜曲中聞ク折柳ヲ

何人カ不ラレ起コサ故園ノ情ヲ

⑦ 月夜

杜甫

今夜鄜州ノ月
閨中只ダ獨リ看ルナラン
遙カニ憐レム小兒女ノ
未ダ解セルヲ憶フヲ長安ヲ
香霧雲鬟濕ヒ
清輝玉臂寒カラン
何レノ時カ倚リテ虚幌ニ
雙ビラサレテ淚痕乾カン

⑧ 登高（レルキニ）

杜甫

風急ニ天高クシテ猿嘯ク哀シ
渚清ク沙白クシテ鳥飛ビ廻ル
無邊ノ落木蕭蕭トシテ下リ
不盡ノ長江滾滾トシテ來ル
萬里悲秋常ニ作リレ客ト
百年多病獨リ登レル臺ニ
艱難苦ダ恨ム繁霜ノ鬢
潦倒新タニ停ム濁酒ノ杯

〈書き下し文の確認〉

①　易水送別　駱賓王

此の地燕丹に別る
壮士髪冠を衝く
昔時人已に没し
今日水猶ほ寒し

えきすいそうべつ　らくひんのう
このちえんたんにわかる
そうしはつかんむりをつく
せきじひとすでにぼっし
こんにちみずなほさむし

②　春望　杜甫

國破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは
鳥にも心を驚かす
烽火三月に連なり
家書萬金に抵たる
白頭搔けば更に短く
渾て簪に勝へざらんと欲す

しゅんぼう　とほ
くにやぶれてさんがあり
しろはるにしてそうもくふかし
ときにかんじてははなにもなみだをそそぎ
わかれをうらんではとりにもこころをおどろかす
ほうかさんげつにつらなり
かしょばんきんにあたる
はくとうかけばさらにみじかく
すべてしんにたへざらんとほっす

〈書き下し文の確認〉

③ 月に對して元九を憶ふ　白居易

銀臺金闕夕沈沈
獨り宿し相思ひて翰林に在り
三五夜中新月の色
二千里外故人の心
渚宮の東面煙波冷やかに
浴殿の西頭鐘漏深し
猶ほ恐る清光の同じく見ざるを
江陵は卑濕にして秋陰足る

つきにたいしてげんきゅうをおもふ　はくきょい
ぎんだいきんけつ　ゆふべちんちん
ひとりしゅくしあひおもひて　かんりんにあり
さんごやちゅう　しんげんのいろ
にせんりのがい　こじんのこころ
しょきゅうのとうめん　えんぱひややかに
よくでんのせいとう　しょうろうふかし
なほおそるせいこうの　おなじくみざるを
こうりょうはひしつにして　しゅういんたる

④ 秋夕　杜牧

銀燭秋光畫屏冷やかなり
輕羅小扇流螢を撲つ
天階の夜色涼水の如し
臥して看る牽牛織女の星

しゅうせき　とぼく
ぎんしょくしゅうこう　がへいひややかなり
けいらしょうせん　りゅうけいをうつ
てんかいのやしょく　りょうすいのごとし
ふしてみる　けんぎゅう　しゅくじょのほし

〈書き下し文の確認〉

⑤ 靜夜思　李白

牀前月光を看る
疑ふらくは是地上の霜かと
頭を擧げて山月を望み
頭を低れて故郷を思ふ

せいやし　りはく
しゃうぜんげっこうをみる
ふたがふらくはこれちじょうのしもかと
かうべをあげてさんげつをのぞみ
かうべをたれてこきゃうをおもふ

⑥ 春夜笛を聞く　李白

誰が家の玉笛か暗に聲を飛ばす
散じて春風に入りて洛城に滿つ
此の夜曲中折柳を聞く
何人か起こさざらん故園の情を

しゅんやふえをきく　りはく
たがいへのぎょくてきかあんにこゑをとばす
さんじてしゅんぷうにいりてらくじょうにみつ
このよきょくちゅうせつりゅうをきく
なんびとかおこさざらんこえんのじゃうを

〈書き下し文の確認〉

⑦ 月夜　杜甫

今夜鄜州の月　げつやとほ
閨中只だ獨り看るならん　けいちゅうただひとりみるならん
遙かに憐れむ小兒女の　はるかにあはれむじょうじじょの
未だ長安を憶ふを解せざるを　いまだちゃうあんをおもふをかいせざるを
香霧雲鬟濕ひ　かうむうんかんうるほひ
清輝玉臂寒からん　せいきぎょくひさむからん
何れの時か虛幌に倚り　いづれのときかきょこうにより
雙び照らされて淚痕乾かん　ならびてらされてるいこんかはかん

〈書き下し文の確認〉

⑧ 高きに登る　杜甫

風急に天高くして猿嘯哀し
渚清く沙白くして鳥飛び廻る
無邊の落木蕭蕭として下り
不盡の長江滾滾として來る
萬里悲秋常に客と作り
百年多病獨り臺に登る
艱難苦だ恨む繁霜の鬢
潦倒新たに停む濁酒の杯

たかきにのぼる　とほ
かぜきゅうにてんたかくしてえんしょうかなし
なぎさきよくすなしろくしてとりとびめぐる
むへんのらくぼくしゃうしゃうとしてくだり
ふじんのちゃうかうこんこんとしてきたる
ばんりひしゅうつねにかくとなり
ひゃくねんたびゃうひとりだいにのぼる
かんなんはなはだうらむはんそうのびん
りゃうたうあらたにとどむだくしゅのはい

高等学校
国語（国語総合　古典）

漢詩の学習（基礎編）

以上で、漢詩を用いた、漢文の訓読についての学習を終わります。

混沌としている時代にこそ、多くの書を読み、自ら考えることを鍛え、適切な判断ができる力を磨くのに適しているのかもしれません。そのためにも、古典を紐解くことに価値があります。不透明で予測不可能な時代に、希望の光を自ら見出す力を育んでください。